平野秀吉の偉業と会津八一について

槇田善衛

一、ある胸像について

上越教育大学附属小学校の敷地内に、胸像が建っている（図1、2、3、4）。注意していないと見逃してしまい、また、目に留まったとしても、胸像の主がどんな人物で、どうしてこの地に建てられたのか知る人は少ないだろう。私は上越教育大学に在籍していることもあり、この胸像の主を調べることにした。調査を進めると、胸像の主は平野秀吉といい、巻町（現、新潟市西蒲区）出身であることが分かった。私も近隣の出身であるため、親近感を覚え、調査に熱が入った。

胸像の碑文（裏書き）は、左のように記されていた（図5）。平野秀吉は明治六年六月五日に生まれ、十八才で小学校長に就任。明治三十四年の春、高田師範学校に赴任し、以後三十数年勤務。学生に道を説いた偉大な教育者であることが分かった。

恩師従六位勲六等平野秀吉先生ハ明治六年六月五日本縣巻町ニ生ル先生資性頴悟年十八ニシテ小學校長トナリ二十二ニシテ中學校教諭トナル明治三十四年任ヲ我ガ母校ニ受ケテヨリ今春職ヲ退クニ至ルマデ勤績貫ニ三十有四年其ノ間中等學校長高等學校教諭等ニ擬セラルルコト数次皆固辞シテ就カズ名利ヲ外ニシテ一ニ其ノ道ヲ楽シム先生篤學力行教ヘテ倦マズ諭シテ諭ラズ門弟三千風ヲ慕ヒ徳ニ服シ相會スレバ談必ズ其ノ事ニ及ブ洵ニ一世ノ儀表ト謂フベシ乃チ茲ニ像ヲ建テテ永ク之ヲ仰クト爾云フ

昭和九年十月十七日建設　　髙田師範學校同窓会

昭和二十六年三月再建

本稿は平野秀吉と高田師範学校について調査することで、高田師範学校、新潟大学高田分校、上越教育大学へと続く、教員養成学校の理念を知ることができると考えている。また、後に示すが、平野秀吉と会津八一の意外な接点が明らかになったので、それについても述べる。

図1．左が附属小学校の校舎

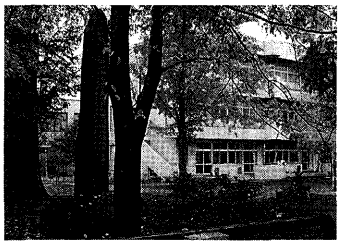

図2．中央が校舎

図3．図2を左に旋回

図4．平野秀吉（胸像）

図5．胸像（裏）碑文

図1～5は、
平成24年11月23日（金）
槇田撮影。

二、平野秀吉と高田師範学校

平野秀吉の人物像と顕彰碑建立の経緯について、次に示す[1]。ちなみに、高田師範学校の跡地は、現在、上越教育大学附属小学校と上越教育大学学校教育センターが設置されている。

「平野秀吉という人」

母校の教育、公孫会の発展史を語る時、必ず平野秀吉の名があげられる。平野はよき教育者であると同時に、公孫会のよき育成者であった。（略）。

「師父と仰がれて」

高田師範学校の入学試験に合格した多くの生徒は、「師範学校には、平野という先生がいてとても厳格だぞ。しかし、よく面倒もみてくれる。」と先輩たちから聞かされるのが常だったという。平野は、頭の大きいわりに少しほおがこけ、口をおおった髭もやや下がり気味で、顔をちょっと上向きにして眼鏡ごしに人を見る—それがまた、一種の威圧感を漂わせるというような人だった。

教室へ入ってくるとひと言もむだな話をせず、すぐ授業を始める。淡々とした口調で、講義は一糸の乱れもない。生徒たちはいつの間にかそのペースに引き込まれ勉強を余儀なくされ、いつしか予習をしてくるような心境になってしまう。

一方、舎監としても、校則にすこぶる厳しく校風の違背には容赦しなかった。しかし、一時的な感情や恣意に流れた言動は全くなく、しかも、ねんごろに戒める言葉には、平野の誠意が十分くみとられ生徒もいつしか頭を深くたれ、聞き入る場合が多かった。このように厳しい平野だったが、生徒の面倒みは良く保証人から問題生徒の世話、卒業後の新任校への配慮等、実にきめ細かいものだった。

平野は教諭として、また舎監として師範教育に専念したが教員養成の仕事を無情の喜びとしていた。高田師範在職中にも旧制の中学校長に、高等学校教授に、あるいは東京帝大の上田萬年博士の助手にと、しばしば栄転の招きを受けたが、平野は教師養成に生命をかけていること、この高田の土地を愛すること等を理由に高田の地を動こうとしなかった。大正十年八月退任、長年にわたる功労により、従六位勲六等瑞宝章を受けたが、その後も引き続き授業嘱託として昭和九年三月まで、通算三十三年間、ここ高田師範学校に勤務し、動向の歴史を築いてきた。

「顕彰碑の建立」

昭和九年春、平野が授業嘱託の職を退いたとき、高田師範学校の同窓生3、000の教え子たちから期せずして、その胸像建立の話がわきあがった。平野は、かたく辞退したが、再三のすすめで「これは情に厚く恩義を重んずる子弟の記念像である。与えられるものの光でなく、与える者の尊い心の輝きである」と納得し、快く承諾したのである。（略）。胸像制作者には、池亀輝治、撰文の立稿に東京文理大の丸山林平、台石工事は真野叱石にそれぞれ依頼した。九月二日地鎮祭、十月十四日修祓式を挙行、十月十七日除幕式が行われた。（略）。

建立された胸像は、戦時中供出されたが、高田師範学校五十二年にわたる歴史の幕を閉じる最後の卒業式となった昭和廿六年三月、新潟大学教授 戸張幸男の手になる胸像が多くの教え子たちの手によって再建され感動の除幕式が行われた。

1 記念誌編集部『公孫樹下の八十年』公孫会,1982,pp.181-184（著者罫線引）。

三、平野秀吉と会津八一

平野秀吉の死後、出版された「良寛と万葉集」（東京・文理書院）について、会津八一が推薦文を記している。会津八一の平野秀吉に対する評価がうかがえる文章である[2]。

著者平野先生の教え子に、故会津八一氏がおられた。会津氏は、旧版が出版された、昭和廿二年の十一月廿一日「夕刊ニイガタ」に次の推薦文を寄せておられる。

『われらの良寛さまが、万葉調の歌人であったことは、あまりにも知れわたっているが、5、000首に近い万葉集の中で、どんな歌が一番お好きであったかは、われわれとして見のがしがたい問題だ。

佐々木信綱君の「万葉清話」という本の中に、良寛さまが万葉集から190首を選んで「秋の野」と名づけて手ずから書きのこされたものがあることが書いてあるが、平野さんは若い頃、同じ本のいくらか出入りのある写本を見つけて筆写しておかれた[3]という。それを、「万葉清話」に出ているのと比べ合わせながら、親切な註釈をつけられたものがこれである。

短歌入門という小書きがしてあるので、著者の用意がうかがわれるが、われわれ越後人が良寛さまと万葉集とを一度に勉強することができてありがたい本といわなければならない。

平野さんは明治廿八年に私がまだ十五歳で中学一年生の時に作文を教えてくれられた先生でそのころは、先生も随分若い先生であったが、若い頃から非常な勉強家で、また親切な教師であった。そして、今年七十五才で高田で亡くなられるまで、一生を郷土の先生で暮らされた。

そして、この平野さんは御自分でも若い頃から万葉集が好きで、年来研究を積まれて、「万葉集全釈」という大きな遺著があるというほどであるから、今時のブックメーカーとちがって、力にゆとりがあって、説明も行き届いたものであり、良寛なり、万葉なりを越後人にのみこませるには、うってつけの適任者であった。』

会津八一のこの一文は、著者平野秀吉先生の一面をよくとらえ、本書の性格をも適切に評価している。（略）。

また、平野秀吉が早くから万葉集に注目していたことをうかがわせる文章を次に示す[4]。

万葉集については、早くから関心を持ったようである。小学校を卒業し、国上村の教員になった十四才のころ、下宿の蔵書でみつけた万

---

2 平野秀吉『良寛と万葉集』文理書院,1966(2版),pp.1-4,276,277（著者罫線引）。

3 「十四才の春、秀吉は初めて親元を離れ、同郡国上村（現分水町）国上小学校に、やはり授業生として赴任した。（略）。秀吉は校長の世話で、学校と道一すじ隔てた涌井唯一と呼ぶ大庄屋の二階の一隅を宿とした。この涌井家は、良寛もしばしば立ち寄った家で、（略）。家にあっては、二間続きの細長い部屋の、一方の壁側に積んであった涌井家の書籍を、手当たり次第、勝手に引き出して読んだらしい。ある日、その積本の下から紙二、三〇枚の写本が見つかり、秀吉はこれをひまにまかせて書き写した。（略）。それから五十七年後、偶然、良寛が万葉集中より選歌した「秋の野」が、このときの本であることを知り、晩年の名著「良寛と万葉集」が生まれたのである。（略）。」〔小泉孝『巻町双書第17集　平野秀吉』巻町役場,1971,pp.2-3。〕

4 小泉孝『巻町双書第十七集　平野秀吉』巻町役場,1971,pp.46-47（著者罫線引）。

葉集歌抄を筆写し、十九才頃には、万葉集寛永版本の原文を写し、研究を始めている。廿一才の頃の随想録「松風」には、万葉と新古今の歌を比較批評して、万葉集に思いをよせている。

明治三十一年かれが廿五才の時、江戸時代末期の歌人鹿持雅澄の「万葉集古義」を得て、この著書の絶大な精力と、広く深い学識に敬服したのであるが、なお、意に満たないものがあり、自力で全釈をしようと決意し、文献の収集を始めた。（略）。

この会津八一の推薦文と、前述の文章を照らし合わせながら考察すると、平野秀吉が廿三才の時、会津八一は十五才（中学校一年級）（表）。また、前述の文章から分かるように、平野は既に十四才で万葉集と出会い、十九才で万葉集寛永版本の原文を写し、廿一才の随想録「松風」で万葉集に思いをよせている。さらに、明治三十一年、平野が新潟県立新潟中学校助教諭となって三年目（授業嘱託から数えて四年目）、八一が新潟中学校四年級のとき、鹿持雅澄の「万葉集古義」を得て、解読し全釈を決意している。このことから、平野秀吉が新潟中学校で教鞭を執っていた頃は、万葉集において相当な見識を有していたことが考えられる。

また、会津八一の「『鹿鳴集』後記」に、次の記載があるので紹介する[5]。

予の郷里は越後の新潟なり。父母は久しく、叔父が継ぎたる本家に同居し、我等兄弟は其所にて生れ、また人となれり。しかるに叔父は幼時より秀才をもって、稱せられし人にて、田舎にはめずらしきばかりに、一応和漢洋の学に通じ、読解力もあり、筆跡も唐様にて美しかりき。その頃新潟の鎮守なる白山神社の禰宜の日野資徳という人あり。叔父はこの人に就きて和歌を学び、この社中の高足なりしかば、予は小学校への途中に、しばしば詠草を携えて其門に遣わされしことあり。そもそも予が中学に入りし頃より、何かというと懇に文学の方向に導きくれしはこの叔父なれば、今ここに至りても深く心に銘記して感謝し居れど、当時叔父が熱心に凝り居たる、その桂園風の和歌には、子供心ながら少しも興味を覚えざりき。

しかるに明治三十二年四月、中学五年級に進み、国語教科書として課せられたる三上、高津の『日本文學小史』の中に、作例として挙げたる記紀萬葉の古歌を読むに及び、不思議とも云ひつべきほど強き感動を覚え来りしかば、先ず当時は大阪積善館の刊行にて専ら世に行はれ居たりし『略解』[6]を求め、遂には其頃この地方にては高等女学校の図書室ならでは蔵するもの無かりし『古義』[7]をわざわざ人を介して折々借り出し来たり、日夜に読耽りて、忽ち俄か作りの萬葉学者となり、毎週教場にて、国語の教師に向ひて、質問戦の先鋒をつとむるを聊か得意となりし居たり。これよりさき我等は郷党の高僧として、また奇人として、良寛禅師の逸話に耳慣れ居たりしが、禅師の歌とし

5 会津八一「『鹿鳴集』後記」、会津八一『会津八一全集　第十一巻』中央公論社,1981,pp.266-267（著者罫線引）。

6 『略解』は「萬葉集略解」。これは文化九年に橘千陰が刊行した萬葉集の解説本。

7 『古義』は「萬葉集古義」。これは明治十二～十六年に鹿持雅澄が宮内省から刊行した萬葉集の解説本。

て聞きしものは、みな云ひ知れず懐かしき響きありて、我等が幼時教へこまれし小倉百人一首の類とは、いたく調子の異れるものあるを、かねて怪み居たりしに、これぞ『萬葉集』の調子なりけるよと、初めて悟りしことも深き歓の一つなりき。

しかるに此の年の早春より予はたまたま俳句を始め、『ホトトギス』『日本』などを愛読しつつ句作に熱中し居たりければ、同じく『萬葉集』を宗とする正岡子規等の作歌に接する機会もしばしばなるについれて、忽ち其主張風流に傾倒し、俳句のかたわら歌をも作り始めたり。もとより素養も無き少年の、一口に歌を作るといひても、なかなか容易のことにあらず。（略）。しかるにこの頃一二年下級なる友人のうちには、例の日野氏の家塾に通ひて『枕草子』『源氏物語』の講義を聞くこと流行せしが、ある日、日野氏は憤然として一同に向ひ、近来何者か萬葉體の歌を作りて折々新聞に出すものあるも、そもそも『萬葉』は遠き世の私集にして、中には漁樵田夫の作をさへ載せたれば、構成の勅撰集の風雅に比するべくもあらず。もとより今にして鑑と為すべきにあらず。さても世に不心得なる者もあるものかなと、深く誡められしよし、たまたま聴講のために席末にありし世が妹は、帰り来たりてゆゆしげに物語れり。（略）。

ここで注目しなければならないのは、次の三点。

① 明治三十二年四月について。平野秀吉の略歴をみれば[8]、「明治三十二年三月に富山県立第三中学校教諭」となっている（詳細は後述「四、平野秀吉と富山県第三中学校」にゆずる）。しかし、青山百年史[9]の記載によると、平野秀吉は明治廿八年九月～明治三十三年三月と記されている。会津八一は明治廿八年四月～明治三十三年三月まで在学しており、平野秀吉と会津八一は同時期を過ごしていることになる。ちなみに、平野の担当は国語・習字であった。

② 会津八一の在学中の国語の教師について。国語を教えていた職員を挙げれば、平野秀吉を含め、次の九名となる。遠藤国次郎（国語）明治廿五年六月～明治廿九年四月。足立鍬太郎（国語）明治廿七年十月～明治廿八年八月。西脇又作（国語・歴史・習字）明治廿九年三月～明治三十三年三月。田中敏治（国語）明治廿九年四月～明治三十年五月。吉川純三郎（国語・数学・地理）明治三十年三月～明治三十一年六月。小串隆（国語）明治三十年七月～明治三十五年十一月。山本栄蔵（国語・習字）明治三十一年十一月～明治三十二年九月。藤原紫朗（国漢・習字）明治三十二年九月～明治三十四年四月。前述のとおり、中学五年の会津八一が「国語教科書の『日本文學小史』の作例にある記紀萬葉の古歌に感動」し、『略解』や『古義』に興味・関心をもち、俄か作りの萬葉学者なる位、影響を与えた「国語の教師」は明治三十二年四月～明治三十三年三月に教鞭をとっていた。この間、教鞭をとることができる教職員は次の五名となる。平野秀吉（国語・習字）、西脇又作（国語・歴史・習字）、小串隆（国語）、山本栄蔵（国語・習字）、藤原紫朗（国漢・習字）。このうち、山本栄蔵（国語・習字）、藤原紫朗（国漢・習字）はそれぞれ半年だけの付き合いとなり、影響を与えるには短すぎる。そう考えると、平野秀吉、西脇又作、小串隆

8 前掲4,pp.89-92。

9 新潟県立新潟高等学校『青山百年史』新潟高等学校創立百周年記念実行委員会,1992,pp.863-864。

の三名に絞られる。この三名の中で、「万葉集」に造詣が深いのはだれか。平野秀吉は「明治三十一年かれが廿五才の時、江戸時代末期の歌人鹿持雅澄の「万葉集古義」を得て」とあるように、会津八一が強い感動を覚える前に、『古義』を精読している。さらに、続きの文章で、「良寛禅師の逸話に耳慣れ居たりしが、禅師の歌として聞きしものは、みな云ひ知れず懐かしき響きありて、我等が幼時教へこまれし小倉百人一首の類とは、いたく調子の異れるものあるを、かねて怪(あやし)み居たりしに、これぞ『萬葉集』の調子なりけるよと、初めて悟りしことも深き歓の一つなりき。」とあるように、良寛の歌は万葉調だったのだと感嘆している。良寛の歌を学び、万葉集の研究に造詣が深い平野秀吉の外にあり得ないと考えられる。

③　中学在学中の会津八一は和歌よりも俳句に興味・関心が強い。明治三十二年に発表した「蛙面房俳話」「をかし記」はいずれも、俳句についての論評であり、和歌についてではない。さらに、叔父の師である日野資徳は『萬葉集』を評価していなかったことからも、会津八一が和歌より俳句に傾倒していたのは自明の成り行きである。このことから、和歌に興味・関心が薄かった会津八一に和歌のすばらしさを教え、さらに、『萬葉集』と良寛さまを結びつけたのは、中学校五学級の「国語の教師」である平野秀吉だと考えられる。具体的な裏付けは不明であるが、同様の見解を示した記載があるので、次に示す[10]。

明治三十二年（一八九九）、新潟中学五年生のとき、教科書に収められた記紀万葉の歌のなにがしかを読んで「不思議とも云ひつべきほどに強き感動を覚え」（『鹿鳴集』）、『万葉集略解』を繙(ひもと)き、新潟では新潟高等女学校（現在・県立新潟中央高等学校）にだけあった『万葉集古義』を借りて読み、「俄か作りの万葉学者となり、毎週教場にて、国語教師に向ひて、質問戦の先鋒をつとむるを聊か得意となし得たり」（同上書）と後年、回想している（この「国語の教師」の一人が『良寛と万葉集』の著者、故平野秀吉氏である）。（略）。

さらに、前述の著者は、「会津八一に、俳句のみならず、短歌の素養がはやくからあったことはまぎれもない。」として、その理由を次のように示している[11]。「『東北日報』明治三十四年（一九〇一）一月二十日号の歌壇に『白水郎』のペンネームをもって、初めて作品十首が公表されるにいたった。『白水郎』はもとより『万葉集』からの名である。（略）。詞書から始まって、すべてを『万葉集』に学ぼうと努めている。」とあるように、会津八一は明治三十四年（一九〇一）一月の時点で、和歌に興味・関心を抱いていることが分かる。裏を返せば、これより前は、和歌にはあまり興味・関心がなかったとも云えるのである。つまり、明治三十二年（一八九九）から明治三十四年（一九〇一）にかけて、じっくりと和歌を学んでいったと考えられる。

早稲田大学を卒業した会津八一は、明治三十九年九月十二日から明治四十三年八月三十一日の約四年間、有恒学舎（現、上越市板倉区針）に勤務している。この頃、平野秀吉は新潟県高田師範学校教諭であった。近郷にいながら、二人は交流しなかったのだろうか。もしかすると、二人は交流を重ね、和歌や俳句について意見を交わしていたのかも知

10　伊丹末雄『会津八一と吉野秀雄』青簡舎,2011,p.36（著者罫線引）。

11　同10。

れない。この約四年間について調べが進むと、平野秀吉と会津八一の関係が明らかになると考えられる。

まず手はじめに、会津八一が交わした書簡三通から、「高田」の地名が書かれている箇所を抜き出した[12]。

(一)「明治四十一年(一九〇八)七月九日(消印七月九日)越後針村より　東京師本郷区森川町一番地牛屋横　櫻井正隆宛　はがき　ペン」

(略)。僕は一昨日高田にて藤のSofaを一脚あがない帰来、此に横臥(おうが)して満堂の蒼縄(あおなわ)を掃(はら)ったり、(略)。

(二)「明治四十一年(一九〇八)七月廿四日(消印七月廿四日)越後針村より　東京師本郷区森川町一番地牛屋横　櫻井正隆宛　絵はがき(春日山林泉寺)ペン」

昨日あまり体屈故高田の女学校を訪問致し候ところ校長以下非常に款待(かんたい)にて大満足致し、七八時間あそび当番製造の午餐(ごさん)の馳走をも受けかえり候。帰村の途高田ステーションにてヤマト新聞をよみにし、はからず石倉君のこと出で居るに一驚を喫し候。同君もまことに御気の毒の目にあはるる人と存じ候。

遠く春日山の方を望めば
つみ上げし白き髑(どく)ろか雲の峯

(三)「明治四十二年(一九〇九)三月三日越後針村より　中蒲原郡五泉町　式場盆平宛　封書　毛筆」

(略)。しかるに近来拙者舊友(きゅうゆう)にて高田町に来たり、石版銅板の制作印刷業をする者有之、(略)。

特に注目すべきは、(二)の「高田の女学校」を訪問したことであろう。高田の女学校は今の新潟県立高田北城高等学校(上越市北城町二丁目八番地一号)で、当時は現在と同じ場所に学校が建っていた[13]。ちなみに、平野秀吉が教諭を務める高田師範学校と「高田の女学校」は道をはさんで三百メートルと離れていない。女学校の当時の校長は山中鉦太郎といい、二代目で、明治三十九年十一月～大正八年五月の十二年六ヶ月在任した[14]。

続いて、具体的な裏付けは不明であるが、有恒学舎に赴任した経緯の記載があるので、次に示す[15]。

道人は明治三十九年七月、二十六歳のとき早稲田大学英文科を卒業した。九月に招かれてこの学校へ赴任したのである。時に月給四十五円で当時の県視学級の高級で多くの人を驚かせた。(略)。不便の地へ赴任するに至った原因は、道人が東北日報で俳句の選者をしていた頃、漢詩の選者が武石貞松で、貞松と朴斎が親友のため、貞松が英語教師として道人を朴斎に紹介したのである。いわば東北日報が同人を頸城の雪に埋める仲介となったようなものである。

12 会津八一『会津八一全集　第八巻』中央公論社,1982,pp.14-75(著者罫線引)。

13 新潟県立高田北城高等学校『「北城の百年」―創立百周年記念誌―』新潟県立高田北城高等学校創立百周年記念事業実行委員会,2001,p.40。

14 前掲13,p.451。

15 渡辺秀英『會津八一の郷像』新潟日報社,1977,pp.343-344。

注目すべきは、「武石貞松（たけいしていしょう）」という名である。紹介文を次に示す。[16]

明治元年（一八六八）一月、蒲原郡長呂村の庄屋武石弘六の長男として生まれた。幼年時から長岡の誠意塾[17]で高橋竹之助（竹之介）に儒学を学び、塾頭を勤めた。その後、仙台の鹿門岡千仞に漢詩を師事した。帰郷して家を継ぎ、そのかたわら「東北日報」の漢詩欄の選者を務め、俳句欄を担当していた会津八一と知り合った。長呂村で私塾修斉館を開き、勤労青少年のため夜学教育を行った。大正二年、南蒲原郡会では南蒲原郡先賢伝の編纂を決定し、郡長田宮従義はその執筆を貞松に依頼した。大正十二年六月『南蒲原郡先賢伝』が発行され、没後の昭和九年六月に『南蒲原郡先賢伝』二輯（しゅう）が発行された。また、耕地整理事業、恙虫病の救済、与板橋の架橋運動などにも尽力した。昭和六年（一九三一）六月十六日、六十四歳で没した。著者はほかに『国会議員大竹貫一伝』がある。彫刻家、武石弘三郎は弟。

武石貞松と増村朴斎の関係について、今後の研究に期待する。

四、平野秀吉と富山県第三中学校

平野秀吉が勤務したと推測される明治三十三年四月から三十四年三月の一年間を前後する、富山県第三中学校の動向について次に示す。[18]

開校の頃

○新入生は１３０名

富山県第三中学校の創設は、勉学を志しながらも、それまで近くに中学がないために断念せざるを得なかった（略）。明治三十二年四月十五日から三日間かけて行われた入学試験には、一年生の志願者の１０８名と、他校からの転校を希望する二年生の志願者30名が受験。一年生１００名、二年生30名が見事合格を果たした。（略）。

○全町をあげて祝った開校式

初代校長には、富山県工芸学校（現高岡工芸高校）の校長である石井祐斎[19]が着任した。明治三十二年五月一日、仮校舎での開校式の様子を富山日報（現北日本新聞）は以下のように記している。（略）。

新校舎の建設

○鰊（にしん）の臭気に耐えて

開校式の翌五月二日から授業が始まったが、生徒１３０名に対して教師は校長を含めてわずか６名。授業も寺子屋の延長のようなものだった。生徒の年齢もまちまちで、小学校を卒業したばかりの生徒に混じってひげ面の妻帯者もいたという。開学の翌明治三十三年四月には65名の新入生を迎えたが、狭い仮校舎には収容できず、隣地にあった鰊倉庫を借りて改造し、第一学年の教室にあてた。また、新旧両校舎の間の約二〇〇坪（約六六〇平方メートル）を借りて運動場とした。しかし、身欠き鰊の臭気は並大抵のものではなかったようだ。

○第三中学から「魚中」へ

明治三十四年十月、告示第１５９号により、富山県第三中学校は「富

16 荒木常能『越佐書画名鑑 第二版』新潟県美術商組合,2002,p.258。

17 長岡市殿町にあった塾（前掲16,p.257〔高橋竹介より〕）。

18 富山県立魚津高等学校百年史編集委員会『魚津高校百年史』富山県立魚津高等学校創立百周年記念事業実行委員会,1999,pp.26-27（著者罫線引）。

19 任期は明治三十二年四月から三十六年十月。〔前掲18,p.286。〕

山県立魚津中学校」と改称され、以後、「魚中」として親しまれるようになる。仮校舎は相変わらず手狭で、生徒たちは薄暗い借家での勉強を余儀なくされていた。（略）。当時の富山日報が「こうした劣悪な教育環境にあっては、生徒の努力の不振も致し方ないことだが、富山・高岡の中学と比較され、第三中学への進学をしぶる傾向が世間に見られた」と書いたように、教育環境の悪さは否定できなかった。（略）。

前述のとおり、富山県第三中学校は明治三十二年五月一日に開学した五年制の中学校である[20]。明治三十二年五月二日の授業開始時には、生徒一三〇名（一年生一〇〇名、二年生三〇名）が在籍し、校長を含め六名の教師で授業を行っていた。明治三十三年四月に六十五名の新入生を迎え、新たに教師が必要となり、平野秀吉が赴任したと考えられる。また、開学間もないため、校舎が手狭で、かつ鰊の臭気が強い等の環境があり、教わる方も教える方も苦しい状態であったことがうかがえる。平野秀吉が高田師範学校に転勤したのは明治三十四年四月であることを考えると、教育環境の悪さが転勤に傾くきっかけとなったことが推測される。

五、平野秀吉の巻小学校時代（恩師）について

平野秀吉を知るための書籍として「平野秀吉」（巻町役場）がある[21]。この書籍に記載されている平野秀吉の巻小学校時代の先生について、新たな知見を示した資料を見つけたので、次に紹介する。

20 前掲18,p.292。
21 同4。

まず、「巻町双書第十七巻　平野秀吉」に記載された内容について示す[22]。

秀吉は幼少の頃から、神童と言われた。明治十二年六月五日、巻小学校に入学し、翌年六月からは、特に漢文を萩原貞と井上幹二郎に、歴史を荻原貞、高宮重継に教えを受けた。荻原貞はもと長岡藩士で巻代官をつとめ、巻小学校第一代目の校長であり、（略）。

前述の荻原貞は、既に巻小学校を退き、貞の二男磐根が教鞭を執っていた。それを示した文を次に示す[23]。

磐根は（明治）十二年四月廿八日、訓導補（首席教員）として勤務します。十五年七月廿九日、七等訓導に任ぜられます。十六年八月廿八日、六等訓導に任ぜられます。そして、十九年六月十一日、訓導兼巻小学校長に任ぜられ、廿年八月三日、尋常科巻小学校長となります。廿五年、巻尋常小学校訓導兼校長に任ぜられます。廿九年十月、四十一歳で休職退職します。磐根は休職退職するまでの十七年七月余の教員生活のすべてを巻小学校で勤務します。（略）。

平野秀吉は明治十二年六月五日に巻小学校に入学し、十八年十月に授業生となり、十九年三月廿六日に卒業。その後、廿年四月までの一

22 前掲4,p.2（著者罫線引）。
23 亀井功『新巻村史話』亀井功,2012,p.190（著者罫線引）。

年余、巻小学校に勤務していた[24]。このことから、荻原貞ではなく、二男磐根に教わり、さらに、卒業後は校長と教員という関係であったことが推察される。

六、平野秀吉の業績について

平野秀吉が著した出版物について、次に紹介する[25]。出版年限は表参照。

（一）「実用日本文典」（明治廿八年、東京・吉川弘文館出版）。
（二）「国語声音学」（明治三十五年、東京・国光社出版）。
（三）「綴り方教授の根本的研究」（大正四年、東京・六合社出版）。
（四）「日本アルプス登山案内記」（昭和二年、東京・斯文書院出版）。
（五）「山嶽歌集駒草」（昭和三年、東京・斯文書院出版）。
（六）「唐詩選全釈」（昭和四年、東洋図書刊行会出版）。
（七）「山嶽の歌高嶺いばら」（昭和十四年、木曜会出版）。
（八）未刊の大著「全釈万葉集昭和略解」（未刊、後に、巻町双書として出版。第廿八集〔昭和五十五（一九八〇）年〕、第廿九集〔昭和五十六（一九八一）年〕、第三十一集〔昭和五十八（一九八五）年〕）。
（九）「良寛と万葉集」（昭和廿二年、文理書院出版）。

七、平野秀吉が関係した建造物について

巻町（現、新潟市西蒲区）の槇神明宮に、「村社槇神明宮」の標石がある（図6）。これは大正八（一九一九）年に、平野秀吉が揮毛したもので、現在も存在する（図7、8）。

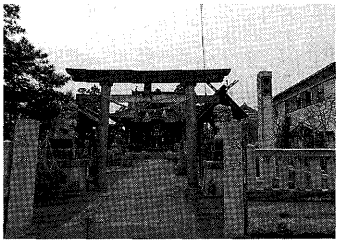
図6.槇神明宮（正面）

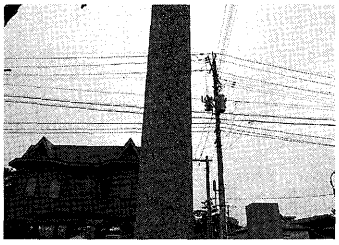
図8.槇神明宮の標石（脇）

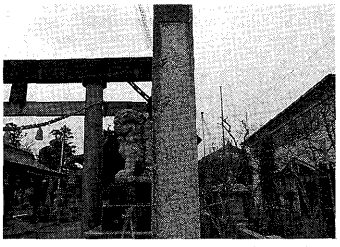
図7.槇神明宮の標石（正面）

図6～8は、
平成24年12月23日（日）
槇田撮影。

八、結び

平野秀吉の勤務年数が「青山百年史」のとおりだとすれば[26]、「平野秀吉の略歴と会津八一の関係」（表）のとおりとなる。会津八一全集に、会津八一が平野秀吉著「良寛と万葉集」の推薦文が掲載されて

24 同4。
25 前掲4,pp.38-61。
26 同9。

いないことも問題ではあるが、それ以上に、会津八一と平野秀吉の関係が歴史の闇に葬られていることは会津八一の人間形成をたどる上で無益である。表に示したとおり、平野秀吉が新潟中学校で教えた四年六ヶ月の間（一年級の途中から五年級まで）、会津八一と共に過ごし、さらに、五年級において、秀吉は八一に教科「国語」を教えた可能性がある。また、会津八一が早稲田大学卒業後、有恒学舎に勤務し、やがて早稲田中学校に赴任するまでの四年間、板倉町（現上越市板倉区針）で生活していた。この頃、平野秀吉は高田師範学校の教諭であり高田の地で過ごしている。このことから、平野秀吉と会津八一は八年六ヶ月の間、あまりにも身近で同じ時間を過ごしているといえる。これは、偶然のことなのであろうか。ここには必然性は存在し得ないのだろうか。もし偶然の出来事としたら、あまりにも出来過ぎた話になる。

今後、平野秀吉の関係者等から、平野と会津八一の交流をうかがわせる文章等（書簡）が発見されれば、この二者の関係も明らかになるであろう。この関係が明らかになれば、高田師範学校の精神的な支柱であった平野秀吉の教育哲学が早稲田大学に伝わり、優れた人物の輩出に貢献したことになり、また、上越教育大学の前身である高田師範学校の教育哲学が有為な人材を輩出したことになると考えられる。

九、後記

これは、平成廿四年度（後期）授業科目「地域教育特論」〔川村知行教授〕（上越教育大学大学院教育研究科）で報告した内容である。平野秀吉が写し、後に「秋の野」として世に出た「安田本」の落丁部分が、「竹内本」の再発見で補えること（平成廿四年十一月廿四日（土）の読売新聞朝刊廿六頁）。また、平野秀吉の憧れの教師は「新保西水」であり、その子「新保寅次」は高田中学校（現、新潟県立高田高等学校）に勤務し、平野家と家族ぐるみの交流があったこと。さらに、新潟県立三条高等学校校歌の作詞者が平野秀吉であること等、平野秀吉が郷土に残した足跡を尋ねることができる素材は沢山ありそうである。

最後に、起稿に際し、川村知行教授、村山和夫・青山増雄両先生方より、ご助言を賜りました。ご令孫岩澤和子さんには、祖父との思い出を伺いました。この場を借りてお礼申し上げます。

〈著者・〒九五九―〇四一二　新潟市西蒲区桑山三一六〉

表　平野秀吉の略歴と会津八一の関係

西暦（号年）		平野秀吉 年齢	平野秀吉 事　項	会津八一 年齢	会津八一 事　項
1873年	（明治6年）	1歳	6月5日、西蒲原郡巻村290番地戸に平野兵吉長男として生れる。		
1875	8	3	弟亥作誕生。		
1879	12	7	西蒲原郡巻小学校入学。		
1881	14	9		1歳	8月1日、新潟市古町通り5番町14番戸に生まれる。父、政次郎。母、イク。父は越後の豪農市島家の一族、葛塚市島家を継いだ助次郎の三男。のち会津家の養子となりイクと結婚。母は新潟市古町料亭会津屋の娘。三男四女あり。八一は二男。
1885	18	13	西蒲原郡巻小学校授業生。	5	
1886	19	14	西蒲原郡巻小学校卒業。	6	
1887	20	15	巻小学校を退職、西蒲原郡国上村国上小学校授業生。	7	新潟市西堀小学校1学級に入学。
1888	21	16	西蒲原郡弥彦小学校授業生。	8	新潟市西堀小学校2学級となる。
1890	23	18	尋常科教員免許状受領。	10	新潟市西堀小学校4学級となる。
1891	24	19	西蒲原郡灰方尋常小学校（現、燕市川前小学校の前身）訓導兼校長（18歳）。歌集「つれづれ草紙18巻」。	11	新潟高等小学校1年級に入る。
1892	25	20	高等科教員免許状受領。西蒲原郡内野尋常小学校。無試験検定により新制の小学校本科正教員免許状受領。東京において大日本教育会の1ヶ月にわたる夏期講習会受講。随想録「松風」「上京日記」執筆。	12	新潟高等小学校2年級に入る。
1895	28	23	「実用日本文典」出版（東京吉川弘文館）。文部省検定試験合格、尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校の国語科教員免許状受領。9月12日、新潟県立新潟中学校授業嘱託。	15	新潟県尋常中学校1年級に入学す。習字は高橋翠邨に学ぶ。「自由新報」に投書して論戦したることあり。問題は弓術に関すること。
1896	29	24	前校助教論。	16	新潟中学校2年級となる。
1897	30	25	水谷コトヂと結婚。新居は新潟市学校町通り2丁目。	17	新潟中学校3年級となる。上級生のクラス会雑誌「芝蘭」に投書して存在を認められる。7月下旬、急性脚気を病み、10月まで腰立たず。
1898	31	26	文部省検定試験合格、師範学校、尋常中学校、高等女学校の漢文科、習字科免許状受領。	18	新潟中学校4学級となる。7月下旬、会津サイ病死す。その養子となりて相続す（7月27日付届出）。9月、新潟中学校へ短艇部脱会願い提出す（9月9日付）。
1899	32	27	2月10日、新潟中学校教論。	19	早春より俳句を始む。4月、新潟中学校5年級となる。記紀万葉（古事記、日本書紀、万葉集）の古歌を読むに及び、強き感動を覚ゆ。6、9、10、11月の「ほととぎす」に投句し掲載さる。7月、新潟へ尾崎紅葉来る。面会す。のちに紅葉より鉄杵という俳号を贈らる。同月下旬より「蛙面房俳話」を「東北日報」に連載す。8月、坪内逍遙、新潟に来り改良座にて講演。それを傍聴し、逍遙の態度と雄弁とに感動す。同月下旬、俳話「をかし記」と『東北日報』に掲載。
1900	33	28	3月、富山県立第三中学校（現、富山県立魚津高等学校）教論。長男秀夫誕生。	20	1月、「蛙面房俳話」を「東北日報」に掲載。新潟中学を卒業。4月、東京に出づ。兄、友一と神田神保町に下宿。6月、下谷根岸に正岡子規を訪う。牛込に尾崎紅葉を訪うも不在。7月、脚気を病み、新潟に帰る。
1901	34	29	新潟県高田師範学校教論。作事町（現大手町）に住す。	21	何となく病身につき何をするともなく俳句に遊ぶ。『東北日報』と『新潟新聞』との俳句選者となる。（略）。
1902	35	30	長女愛子誕生。「国語声音学」出版（東京・国光社）。	22	（略）。4月、東京専門学校高等予科第1期に入学。長谷川輸、阿倍邦太郎と共に、東京史牛込区原町3丁目69番地、玉川温徳方に下宿。（略）。
1904	37	32	高田師範学校舎監兼任。富士登山。二男不二夫誕生。父兵吉死亡。	24	
1906	39	34	二女下枝誕生。	26	7月15日、早稲田大学文学科を卒業。卒業論文「キーツの研究」。8月1日、帰省。（略）。9月12日、新潟県中頸城郡板倉村の有恒学舎（現、県立有恒高等学校）に、英語教師として東京より赴任。
1907	40	35		27	4月、『新潟新聞』の俳句の選者となる。5月2日より6日、佐渡へ修学旅行す。（略）。10月、信州柏原に一茶の跡を訪う。11月9日、直江津郊外郷津の和倉楼に泊る。22日、再び同地に泊る。
1908	41	36	白馬岳登山。	28	2月、一茶直筆の「六番日記」を発見す。（略）。4月、越後国分寺の五智如来をみる。5月、西頸城郡の海岸に修学旅行。同月、日本天文学会会員となる。（略）。8月4日夜、大阪着。初めて奈良地方を旅行し、和歌20首を詠ず。（略）。のち、大阪、京都を経て、14日、金沢にいたる。高岡。伏木より海路直江津に出、針村に帰着。9月4日、新潟市大火のため、生家会津屋罹災。20日、妹、琴を針村によぶ。10月下旬、郷津の和倉楼に泊る。11月、「花環につきて」を『新潟新聞』に4回連載。
1909	42	37	奏任待遇。三女チヨ子誕生。	29	1月、「我が俳諧」を『新潟新聞』に掲載。3月、俳句結社、玻璃金社を主催す。3月29日、高田、直江津に行く。4月10日、11日、有恒学舎創立14周年を記念し、校内において新古俳諧師狂歌師の書画展覧会を開催す。同月、『高田新聞』の俳句選者となる。「俳句を募るにつきて」を『高田新聞』に3回連載。5月16日、佐渡へ修学旅行のため、新井駅に集合、直江津へ。24日、直江津着。5泊6日の予定が8月9日になる。夏、越後の燕に行く。
1910	43	38		30	2月、「地方の特色をして鮮明ならしめよ」を『高田新聞』に3回連載。7月、田中忠太とともに米山に登る。8月下旬、赤倉、苗の瀧、芙蓉湖に遊ぶ。有恒学舎を辞任。9月1日、上京。早稲田中学校に英語教師として転任。（略）。
1911	44	39	三男多聞誕生。秋より、現上越市西城町3丁目7番地（平野不二夫宅）。		
1913	大正 2	41	長男秀夫死亡（享年14才）。		
1915	4	43	母ソチ死亡。「綴り方教授の根本的研究」出版（東京・六合社）。同窓会校友会主催勤続十五年謝恩表彰。		
1916	5	44	四女幸子誕生。		
1919	8	47	高等官六等待遇。		
1921	10	49	高等官五等待遇。依願退職。叙勲六等瑞宝章授与。新潟県高田師範学校授業嘱託。		
1923	12	51	「万葉集全釈」第一次原稿脱稿。		
1924	13	52	新潟県史跡名勝天然記念物調査委員。		
1927	昭和 2	55	「日本アルプス登山案内記」出版（東京・斯文書院）。		
1928	3	56	「山嶽歌集駒草」出版（東京・斯文書院）。		
1929	4	57	「唐詩選全釈」出版（東京・東洋図書刊行会）。		
1933	8	61	還暦祝賀雨飾山登山。		
1934	9	62	高田師範学校授業嘱託依願退職。高田師範学校同窓生による胸像除幕式ならびに謝恩会。		
1939	14	67	「山嶽の歌高嶺いばら」出版（木曜会）。		
1942	17	70	古希祝賀黒姫山登山。		
1943	18	71	胸像供出。「全釈万葉集昭和略解」完稿。		
1946	21	74	弟亥作死亡。門下生主催金婚式祝賀（高田市大町中学校体育館於）		
1947	22	75	脳溢血にて倒れ、同日死亡。「良寛と万葉集」出版（東京・文理書院）。「良寛と万葉集」出版記念講演会。		
1948	23		妻コトヂ死亡。		
1951	26		胸像再建除幕式。		
1966	41		「良寛と万葉集」増補改訂版出版（文理書院）。「良寛と万葉集」出版記念講演会。		

引用文献

小泉孝『巻町双書第17集　平野秀吉』巻町役場,1971,pp.89-92。
会津八一『会津八一全集　第12巻』中央公論社,1984,pp.501-507。
新潟県立新潟高等学校『青山百年史』新潟高等学校創立百周年記念実行委員会,1992,pp.863-864。

二重線：著者訂正。